

前回私たちは、エルサレムにおいて、パウロがユダヤ人たちによって捕らえられ、異邦人の手、つまり、ローマの千人隊長の手に渡されたことを見ました。実にそれは、神様が御霊によってパウロとその他の弟子たちに示しておられたことですが、この時、それが現実のものとして起こったわけです。このようなことが、突然起こったら、誰もがパニックになると思いますが、でもだからといって、前もって語られていたら大丈夫、というわけでもありません。千人隊長と兵士たちの到着がもう少し遅かったら、パウロは殺されていた可能性も大いにあったのです。

でも、そんな状況の中で、彼は驚くべきことを千人隊長に願います。37節を見ると、そこでは、パウロがギリシャ語を話したことに千人隊長が驚きを覚えています。それは彼が、パウロのことを、以前暴動起こし、四千人の刺客を荒野に引き連れて逃げたエジプト人と思い込んでいたからです。ですから、パウロが教養のあることを示すギリシャ語を話した時、千人隊長は、自分の間違いに気づくと共に、それに驚きました。

でも、ここで私が驚いたのは、このタイミングで、パウロが人々に話すことを願い出たということです。皆さん、あなたなら、このような状況で落ち着いて話ができると思いますか？ついさっきまでパウロは、ユダヤ人たちに打ちたたかれていたのです。しかも、彼らはパウロを殺す気でした。その後、群衆の暴行を避けるために、兵士たちがパウロをかつぎ上げますが、人々は「彼を除け」と叫びながらついて来たのです。いくら彼らの訴えが正しくなくても、そんな人々に弁明しようとあなたなら考えますか？私なら、きっと手も足も震えて、何も言えない状態になっていたと思います。

では、なぜパウロは、彼らに対して弁明しようとしたのでしょうか？自分に対する訴えが偽りであることを今そこで明らかにしないと、彼の気が済まなかったからですか？自分を訴えた者たちに、すべての責任を取らせようと、彼は話すことを願ったのですか？パウロとしては、具体的にどのような形かは示されていないけれども、なわめと苦しみが待っていることを知った上で、エルサレムに来ました。ですから、自分が受けた仕打ち自体は、喜ばなかったとしても、彼はこの機会を、主の御名のため、つまり、主を証する機会と捉えたのです。そのことのためにこそ、死をも覚悟しつつ、エルサレムに来たからです。

そのような考えは、この世の常識からすると、ズレているように思えるかも知れません。でも、それはパウロだけでなく、聖霊を受けた弟子たちももっていた視点です。いかがですか？同じく御霊を受けているあなたも、そのように主の御名のため、つまり、主を証することを最も重要なこととして受け止めておられるでしょうか？そして、そのような歩みを心がけておられますか？「人々に話させてほしい」というパウロの願いは聞かれ、この後パウロは、階段の上に立ち、そこから群衆に向かって彼らの言語であるヘブル語で語り始めます。ここから22章に入ります。

長い箇所なので、全部を細かく見ることはしませんが、いくつかのことを上げつつ、見ていきたいと思えます。まず3-5節「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。4 私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らせたのです。5 このことは、大祭司も、長老たちの全議会も証言してくれます。この人たちから、私は兄弟たちへあてた手紙までも受け取り、ダマスコへ向かって出発しました。そこにいる者たちを縛り上げ、エルサレムに連れて来て処罰するためでした」。

ここにはパウロの生い立ちと、彼が「この道」としての主イエスにつくクリスチャンたちに対して以前どのように振る舞ったかが記されています。つまり、自分もこの群衆と同じく、神様に対して熱心な者、律法を重んじる者であったとパウロは言うのです。そして、その熱心さのゆえに、クリスチャンたちを迫害したと。しかも、それは単独で行ったことではなく、その背後には指導者たちのサポートがあったことを彼は明らかにしています。ですから、その信者たちを捕らえるために、ダマスコに向かったのも、それが指導者たちの心になったことであったということです。

ところが、そこで全く予期していなかったことが起こりました。その出来事によってパウロは全く別人のように変えられてしまうのです。というのも、パウロが迫害していた主イエスが、ダマスコ途上にあつた彼にご自身を現されたからです。このパウロの回心の様子は、使徒9章に記されているものとほぼ並行していますが、いくつか新しい事柄も加えられているので、触れておきたいと思います。

まずは、6節にある、その出来事が「真昼ごろ」に起こったということです。昼間とは、太陽が出ていることを前提としていますから、彼があえてそう言ったということは、その太陽の光がありながら、でもパウロの回りを照らした「天からのまばゆい光」は、それにも増して明るく、輝くものであつたということでしょう。11節には、その光の輝きのために、彼の目は何も見えなかったと記されています。

次に、「主よ。あなたはどなたですか」というパウロの問いに、主は「わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスだ」と答えられましたが、この「ナザレ」という地名は、9章にはありません。おそらく、パウロは、この時の聴衆が、ユダヤ人たちであることを意識し、ユダヤの町の名を具体的にあげることで、主イエスをリアルな人物として印象付けようとしたのだと思われます。

さらに9章では、パウロの同行人たちが、「声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた」とあるのに対し、ここの9節では「その光は見たのですが、私に語っている方の声は聞き分けられませんでした」となっています。一見、反対のようにも思えますが、主がパウロだけに語られたという所からして、彼だけが主の声としてのことばを理解できたといえるでしょう。ですから、同行人たちは、その声（音）は聞き、光も見ましたが、主イエスを見、その御声を聞いたのは、パウロだけでした。

最後に、9章では記されていないアナニヤの言葉がここには記されています。14-16節「彼はこう言いました。『私たちの父祖たちの神は、あなたにみこころを知らせ、義なる方を見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定めになったのです。15 あなたはその方のために、すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人とされるのですから。16 さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。』」。

パウロは、このようにして主イエスと出会い、彼自身、その救いにあずかる者とされたわけですが、父なる神様は、なぜ彼にみこころを知らせ、義なる方としての主イエスを見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定められたのでしょうか？なぜ他の人ではなく、パウロだったのでしょうか？それはパウロの方で、彼がそのことを願ったからですか？または、彼の行いが神様に喜ばれるもの、御心に叶ったものだったからですか？パウロの証からも明らかなように、彼は、主イエスのことを義なる方、つまり、救い主とは見ていなかった。むしろ、神を冒瀆する者と考えていました。だから「この道」の人たちを容赦なく迫害したのです。

ですから、パウロとしては、主に現れていただき、あわれみをかけてもらうに値することは何もしていません。むしろ、その反対のことを、神様もそれを喜ばれるだろうと思ひ込んで行っていたのです。そんな彼に主が現れたのが、彼をさばくためであつたのなら、まだ理解できます。でも、主は、あわれみを彼に示されたのです。主はこの上ない寛容を示すことで、彼をすべての人に対するご自分の証人とされました。ですから、パウロとしては、救いのために、彼自身を誇れるようなことは何もしていないのです。それでも、主のあわれみを受けたのは、実に一方的な主の選びによると、彼の内で驚きと主への感謝が生じました。

私はそこに、主のためなら、自分の命もささげるほどにパウロが忠実な者となった理由を見るのです。さばきではなく、主が恵みを施して下さった理由を考えれば考えるほど、それが主の一方的な選びとあわれみによつたという理解によいよ彼が至つたからです。ですから、主への感謝と喜びが彼を満たすことで、彼は主の召しに応えずにはおられない者へと造り変えられました。その後、パウロは、アラビヤでの三年を経て、エルサレムに行きます。同胞たちに主をあかしするためです。ところが、主は彼に現れて語られます。

17-21節「こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていると、夢ごちちになり、18 主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』19 そこで私は答えました。『主よ。私がどの会堂でも、あなたの信者を牢に入れた

り、むち打ったりしていたことを、彼らはよく知っています。20 また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの着物の番をしていたのです。』21 すると、主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす』と言われました」。

アナニヤを通して主が語られたように、彼の人生、いや彼自身が根底から変えられる体験をしたのですから、パウロとしては、自分が見たこと、聞いたことを証せずにはおられませんでした。しかも、彼は義なるお方、主イエスを見、その御声を聞き、この方によって再び見えるようにもされたのですから、そのことを人々に、特に同胞たちに伝えたいと思うのは当然のことでしょう。

でも主は、宮で祈っている彼に現れ、人々が彼のあかしを受け入れないことを告げられます。そして、彼を異邦人のもとへと遣わされるのです。そのことは必ずしも、パウロの意に沿ったわけではありません。でも、それが彼を選び、深いあわれみを示された主の御心であるゆえに、パウロは主に従い、そして、彼の働きを通して、多くの異邦人、またユダヤ人たちが主へと導かれるのです。

いかがでしょうか？ 今日あなたは、主イエスに従う者ですか？ このすばらしい救い主を人々に証することは、あなたの喜びですか？ パウロのように、なわめや苦しみの中で主を証することは決して容易なことではありません。神様の助け、つまり、聖霊の助けなしには、誰にもできないことです。でも、そこがポイントです。主がご自分を信じる者に、聖霊を与えて下さる理由、それは聖霊を通してご自身の栄光を証して下さるため、聖霊を通して、私たちが義なる方を見、その御声を聞くことで力を受け、主を大胆にあかしするためです。

主をあかしするには、みことばが欠かせませんが、みことばに聴く時、あなたはそこで語られていることを信仰によって自分自身とその生き方とに結びつけようとしていますか？ 教会の大迫害者であったパウロを一方的に選び、あわれみを示すことで、彼を救われただけでなく、その恵みの良い知らせを宣べ伝える者とされた主は、同じように、あなたを選び、あなたにあわれみを示すことで、この救いに与る者として下さいました。それは実に、あなたを通して、ご自身のすばらしさが、人々に証されるためです。

自分自身のすばらしさ、自分がいかに主を信じているかを語るのは、証ではありません。私たちは誰も、他者に誇れるような信仰をもっていないのです。でも、義なる方としての主イエスは違います。父なる神様への主の信仰は、罪人のために、ご自身のいのちをも十字架の死に明け渡すほどの完全なものです。私たちは、自分の正しさではなく、この主の正しさ、その信仰深さのゆえに、あわれみを受け、罪の赦しと永遠のいのちを受ける者とされました。その救いを喜び、感謝して進んで主を証する者となるためです。死に打ち勝ち、よみがえられた主は、今日もその御力をもってご自身の名を呼ぶ者を救って下さいます。救い続けて下さいます。そして、終わりの日に、その救いを完成して下さるのです。この栄光の主を証しようではありませんか。